

新刊紹介

過去約2年間に発行された書籍の中から時事的で話題性があり内容豊かなものを会員のご要望に応えながら編集委員会が選択して紹介いたします。

『不屈の棋士』

大川慎太郎 著 | 講談社、2016、318pp.

1980年代のいつだったか、デパートの店先にコンピュータ将棋が置いてあり、小学生だった私が指すとひどい手を指して弱かった。

それから三十有余年、コンピュータ将棋は人間よりも強くなってしまった。

本書はちょうど、このことをプロの将棋棋士を含めて人間側が認めなければならなくなった時に、トップ棋士から若手棋士まで11人の棋士に対して行われたインタビュー集である。

本書で興味深いのは、自らの存在に直結する問題として、利害関係の当事者として、棋士たちが深刻に真剣にインタビューに答えていることである。彼らの直面している事態は、他人事ではない。AI導入による人員削減や店舗削減が、メガバンクによって発表されたことは記憶に新しい。学生の皆さんは卒業後の自らの存在を、教員や職員は将来の自らの存在を想像してみるといい。

様々なことを考えさせられると同時に、将棋界は、私たちにとって利害関係のない他人事でもある。気楽に読みながら考えさせられることの多い本書は、将棋に関心のない人にも興味深く読むことができる。なお本書の出版後、将棋界は現在、空前の将棋ブームに沸き返っている。

評／『彦根論叢』編集委員／鍋倉聡

『イギリスはいかにして持ち家社会となったか：住宅政策の社会学』

スチュアート・ロー 著 (祐成保志 訳) | ミネルヴァ書房、2017、336pp.

本書は、ハウジングを社会政策の中に位置づけ、国際比較の観点を取り入れながら英国の住宅政策の歴史と現在を描き出した一冊である。

単に英国の住宅政策を取り上げるだけでなく、福祉国家の変容を捉えその未来を構想する上で、ハウジングを理解することがいかに重要かを説いている。

本書は英国のハウジングの歴史を遡ることから始め、かつては同じ住宅問題に直面していたドイツと19世紀末に分岐が起こったこと、英国では世界大戦の戦間期に既に持ち家社会が発達していたこと等を、公営住宅の興亡とともに明らかにする。

さらに住宅を社会権として捉え持ち家が優勢でないドイツ等との違いを明らかにし、それとの比較の中に英国の持ち家社会の特性を示す。その上で本書は、ハウジングがグローバル資本と直接結びつくことで一層重要になっていることを示し、アセットベース型福祉国家について論じている。

ハウジングについて幅広い視点とともに歴史を踏まえて厚く論じている本書は、一方で社会政策や住宅政策の研究者や関係者から、他方で単に公営住宅を見て喜んでいる団地マニアまで、意義深く読める一冊である。

評／『彦根論叢』編集委員／鍋倉聡

